



宋雅子音和歌完

特別
~4
8175



84 頁
8175

55

斜研の本。抄下本



斜研抄下本

< 2012-82 >

人

涿子首和歌

卷二百首

宋雅



立之

今朝之れは夜を多し出るは

立之

是乃之乎乃色海河の光線の中

立之

是乃之乎乃色海河の光線の中

立之

是乃之乎乃色海河の光線の中

子と浦

の由に夜をたててはるゝをまじりて別な浦にゆく

好子日

つゝ子代に君の齡をたててはるゝをまじりて

子日去

引き子の日の去るはるゝをまじりてはるゝを

子日祝

おほく大和の國に生かす元を君の子日の去るはるゝを

山を夜

初山を夜に生かすはるゝをまじりてはるゝを

飛を夜

飛を夜の生かすはるゝをまじりてはるゝを

好を夜

今を夜の生かすはるゝをまじりてはるゝを

関を夜

関を夜の生かすはるゝをまじりてはるゝを

経を夜

経を夜の生かすはるゝをまじりてはるゝを

橋を夜

橋を夜の生かすはるゝをまじりてはるゝを

江之辰

伊勢の海や辰をさく流石を萩のふたばをぬき

流石辰

ふみねとくは美濃の辰をぬき辰をぬき辰の辰

川之辰

大井の山をさく辰をぬき辰をぬき辰をぬき

海之辰

浪のさく辰の辰を伊豆の辰をぬき辰をぬき

湖之辰

長岡の辰をぬき辰をぬき辰をぬき辰をぬき

海之辰

辰をぬき辰をぬき辰をぬき辰をぬき

海之辰

辰をぬき辰をぬき辰をぬき辰をぬき

海之辰

辰をぬき辰をぬき辰をぬき辰をぬき

海之辰

辰をぬき辰をぬき辰をぬき辰をぬき

海之辰

辰をぬき辰をぬき辰をぬき辰をぬき

初雪

里中の子供がこれと雪乃遊べり別な夢に夢の中

雪中

方雪は消えぬと云ふも雪は消えぬと云ふも消えぬと云ふも

雪

東を先て今春と昔の雪に今も雪は消えぬと云ふも

雪

神楽ふよみ録へやわらばり一何れも事端に雪は

夕雪

と海の下花は雪ふ小福の如く夕雪をうけて雪は

里雪

花は春の雪の中ふやらのらん里も人の雪は

山中

いよのふか谷を出入は木は古くも雪は

竹

ま乃冬にんは雪は長竹は花は雪は

夜

曉は雪のしれ雪は雪のしれ雪は雪のしれ

雪

雪のしれ雪のしれ雪のしれ雪のしれ雪のしれ

原の草

平野の原の草の中、自然に生えたる草也
沢若草

草花の葉は色は由緒の跡もや、
水色若草

袖着るひねり水は、
田の草

若草田の草は、
草須草

ひねり草は、
草須草

草須草

新花をくさす、
草須草

吹く風を今、
草須草

昔の草を、
草須草

三月の草、
草須草

草は、
草須草

梅意

ふりむり花をいかに集りて
あまの枝に結れ毒の窟

毒肉

ふりむり花をいかに集りて
あまの枝に結れ毒の窟

夜梅

ふりむり花をいかに集りて
あまの枝に結れ毒の窟

夜梅

ふりむり花をいかに集りて
あまの枝に結れ毒の窟

里梅

ふりむり花をいかに集りて
あまの枝に結れ毒の窟

唐梅

ふりむり花をいかに集りて
あまの枝に結れ毒の窟

水梅

ふりむり花をいかに集りて
あまの枝に結れ毒の窟

隣家梅

ふりむり花をいかに集りて
あまの枝に結れ毒の窟

梅移れ

ふりむり花をいかに集りて
あまの枝に結れ毒の窟

梅薫移

ふりむり花をいかに集りて
あまの枝に結れ毒の窟

梅名

さきひつり種いしつは花袖に花留れに神ふりし花

好梅

何よりよめ好かきし花は花老をうけと人かきん

美手梅

侍をよきし花は咲きしり神極をく毒好あま

子梅

よめ好あま咲え梅は花白ひりたふしを光るしりん

落梅

さきかきし花はうりし花白をえ指し梅は梅のりり

柳名

ふりて花は白く人考柳は糸糸をうけよ水の好あ

池柳

池水のさきし花は海草にほれて赤ひくき所

門柳

さき北の柳は扇のさきり花を老を門をえよ無せ

岸柳

さき岸の柳は糸糸を白くえ柳をうけはは川柳

河柳

徳林の柳は指し行末のさきり花をうけはは川柳

路名抄

里人下見方流の中をねむる所なりとの事

岩子殿

田舎の岩子殿の寺なりと云ふ事

熊野子殿

山へ行く所なりと云ふ事

山出月

今一山を去る月なりと云ふ事

関出月

重役の関出月なりと云ふ事

江上月

春海に入江なりと云ふ事

春曉月

暁を告ぐ事なりと云ふ事

春月出

春の月出なりと云ふ事

朝春月

朝の春の月出なりと云ふ事

夕月出

夕の月出なりと云ふ事

谷を渡る

いよいよふもとにふくりに行くよりの谷を渡る

野を渡る

いよいよふもとにふくりに行くよりの野を渡る

豊穰

いよいよふもとにふくりに行くよりの豊穰を渡る

油屋似字

油屋の家の姿をみる
油屋出

春山

春山の花をみる

春節

春節の行事をみる
春節

春山園遊の行事をみる

長河

川流不息の如く長河の如く流るる如く

春の海

長河の如く流るる如く春の海に流るる如く

好遊

永日に入れば無量無数の如く好遊の如く

狂系

長河の如く流るる如く狂系の如く

待た死

長河の如く流るる如く待た死の如く

野中草

野中草の如く流るる如く

路中草

路中草の如く流るる如く

帰居知

帰居知の如く流るる如く

暁海鳥

暁海鳥の如く流るる如く

夕陽鳥

夕陽鳥の如く流るる如く

夜瑞鳥

海鳥若くは鳥のふりまはれをたれかたしとていふは
瑞鳥連ていふ

最海鳥

鳥の好む鳥の好むとていふは
海鳥連ていふ

主海鳥

海鳥若くは鳥のふりまはれをたれかたしとていふは
主海鳥連ていふ

栽花

とていふは鳥の好むとていふは
栽花連ていふ

初花

初花若くは鳥の好むとていふは
初花連ていふ

見花

見花若くは鳥の好むとていふは
見花連ていふ

散花

散花若くは鳥の好むとていふは
散花連ていふ

折花

くさくさ花をりし小瓶花はうおやと肩うりし

中二の折花

交花

人共花を交りて咲花は花をりしと老の身は

曉花

木は花をりし夕花をりしと花は花をりしと

朝花

あすは朝花と夕花をりしと花は花をりしと

夕花

夕花をりし夕花をりしと花は花をりしと

夜花

夜花をりし夜花をりしと花は花をりしと

山花

山花をりし山花をりしと花は花をりしと

原花

原花をりし原花をりしと花は花をりしと

谷花

谷花をりし谷花をりしと花は花をりしと

畧花

畧花をりし畧花をりしと花は花をりしと

松花

梅咲山並花枝の枝とふ花は白ゆふに花開

好花

ありり香と方花、花は花より花は花より

園花

是る香か、花は花は花は花は花は花は花は

花

と花は花は花は花は花は花は花は花は花は

禁中花

花は花は花は花は花は花は花は花は花は

花

花は花は花は花は花は花は花は花は花は

花

花は花は花は花は花は花は花は花は花は

花

花は花は花は花は花は花は花は花は花は

花

花は花は花は花は花は花は花は花は花は

花

花は花は花は花は花は花は花は花は花は

唐花

可なり数なりと云ふ唐の花の記さふと人如二一

花雲

り由ふふふ花の海に共ありるるを以て

関岳花

亦如り後代待神ふ人然るは海に花を以て

花香

花の香りあり花の初春より花の記さふ

花積

花の積りあり花の積りありと云ふ

花枝

花の枝ありと云ふ

花中

花の中ありと云ふ

花根

花の根ありと云ふ

花挿

花の挿ありと云ふ

花向

花の向ありと云ふ

花麻 滌丸

夢心ゆく夢のまゝに〜

花衣

極楽浄土の花をそのまゝに〜

花衣

そのまゝに浄土の〜

花綿

ゆきを〜

花鏡

まを〜

花白

花の白り〜

花色

おのれを〜

花使

同河れ〜

花白

花の〜

花白

花の〜

花見

ふみりしころしやるるはまてはるるう花をきりし

椿花

あや花をきりてふちのあやうしつふあにきりて花のあはれ

落花

あや花をきりてふちのあやうしつふあにきりて花のあはれ

強花

あや花をきりてふちのあやうしつふあにきりて花のあはれ

三月三日

あや花をきりてふちのあやうしつふあにきりて花のあはれ

桃花

花のあはれをきりてふちのあやうしつふあにきりて花のあはれ

梨花

あや花をきりてふちのあやうしつふあにきりて花のあはれ

山田苗代

あや花をきりてふちのあやうしつふあにきりて花のあはれ

路苗代

あや花をきりてふちのあやうしつふあにきりて花のあはれ

河原苗代

あや花をきりてふちのあやうしつふあにきりて花のあはれ

夕暉

暮海の夜下乃流ゆは月待てやるるの留し世

田舎

花よりともさ言ぬしこころはく葉はなふ種は

好草

昔ははれはあはれとあはれとよ新入ら飛くまゝ人

庭草

垣根より草ふまはり一葉も子飛送て秋もくまゝは

摘草

その花も子も言ふ深な袖をたてりしは信ふ子に務は

去下 蹴躑

おれはくは去下たるの定所一掃するとも友もせん

蹴躑 水

おれをなす躑躅のふもくは定ねははれし一掃はなす

池水

紫は知れはり一掃をなすともみありしは花はなす

池水

池水のあまふ花もなすともはれしは去下はなすともは

歎き

斧おえのりし隙の山吹く山吹のあふはれはなすともは

夕歌冬

月を宿屋の巻のうらやま夕日さき歌をぬる

路歌冬

おとろしとこえぬ美りおや居たり歌をぬる

比歌冬

池水の玉座を並て山吹の巻さうありふまの巻

河歌冬

うね川定を流りりーさそけり美りさしふあま

海歌冬

磯の小浜を傍のむうーなうーぬるさあけらるる

岸歌冬

あゝ東流りる花の傍りて極ゆるさう岸を歌

里歌冬

神のまてをさうりるあり山吹の花をさうりる

庭山吹

庭のゆよよのまよ小な花さうりるさうりる

巻歌冬

巻をねふ草をりりりりりりりりりりりりりり

夕夜

あうらるるあまの夜よさう夜の海を入日の影を

曼珠

花のよも川をを思ふのきよき岸よりかゝるやわらわ

池友

川吹のやあなれえ咲友は花のきよき川にのこりて

江友

そ凡のきよく入河の咲友の流すうらあまのよき

浦藤

波のきよき浦の流すのきよき浦のきよき

津友

子口のきよき津の流すのきよき津のきよき

野友

作のきよき野の流すのきよき野のきよき

春友

流すのきよき春の流すのきよき春のきよき

若友

若のきよき若の流すのきよき若のきよき

若友

若のきよき若の流すのきよき若のきよき

若友

若のきよき若の流すのきよき若のきよき

言とて寝

いふ事多し我は名所の海の妙やとてあつたはるはる見
ぬまに不注

まふ事又少くも身若て花も多しと何事とせん

精三月片

平少無ふうとてあつたはるはる見ぬまに不注

二月片夕

平少無ふうとてあつたはるはる見ぬまに不注

三月片夜

平少無ふうとてあつたはるはる見ぬまに不注

閏三月片

平少無ふうとてあつたはるはる見ぬまに不注

夏百首

その夏

今朝わいふ事多し我は名所の海の妙やとてあつたはるはる見

朝文家

今朝わいふ事多し我は名所の海の妙やとてあつたはるはる見

夏家精春

今朝わいふ事多し我は名所の海の妙やとてあつたはるはる見

春家

名は小の程は花と云ふは所よと云ふは所よと云ふは所よ

新樹

世は元来花は花と云ふは所よと云ふは所よと云ふは所よ

新花

花は元来花は花と云ふは所よと云ふは所よと云ふは所よ

新花

花は元来花は花と云ふは所よと云ふは所よと云ふは所よ

新花

花は元来花は花と云ふは所よと云ふは所よと云ふは所よ

新花

久遠の昔は花は花と云ふは所よと云ふは所よと云ふは所よ

新花

花は元来花は花と云ふは所よと云ふは所よと云ふは所よ

新花

花は元来花は花と云ふは所よと云ふは所よと云ふは所よ

新花

花は元来花は花と云ふは所よと云ふは所よと云ふは所よ

新花

花は元来花は花と云ふは所よと云ふは所よと云ふは所よ

新花

花は元来花は花と云ふは所よと云ふは所よと云ふは所よ

先々のまゝにせうう程にふりかへるその初をいふに

人傳郭云

郭云同く郭乃中よき人に人をいふなりと云ふ

郭云未通

郭云早し里別なまなりと云ふは待てりりれ

月前郭云

里多女月小はれはては河を我を和とていふと云ふ

中井郭云

待り月小はれはては河を我を和とていふと云ふ

西中河を

しつゝあをたのう後よりりた先のまゝに待りり郭云

曉郭云

郭云注のまゝに別とて神はり神の神をいふ

曙郭云

月小はれはては河を我を和とていふと云ふ

羽郭云

待り月小はれはては河を我を和とていふと云ふ

夕郭云

郭云西に子夢初河を我を和とていふと云ふ

夜郭云

まのくしと公をうゝ郭をうゝとてまのくしをうゝとて夜を元

山郭云

郭をうゝとて公をうゝとて山をうゝとて公をうゝとて先

松郭云

郭をうゝとて公をうゝとて山をうゝとて公をうゝとて

岩郭云

里のくしと公をうゝとて郭をうゝとて公をうゝとて

野郭云

山をうゝとて公をうゝとて郭をうゝとて公をうゝとて

原郭云

みまのくしと公をうゝとて郭をうゝとて公をうゝとて

岡郭云

郭をうゝとて公をうゝとて山をうゝとて公をうゝとて

浦郭云

山をうゝとて公をうゝとて郭をうゝとて公をうゝとて

差中郭云

山をうゝとて公をうゝとて郭をうゝとて公をうゝとて

寝見郭云

山をうゝとて公をうゝとて郭をうゝとて公をうゝとて

独歩郭云

祇ておろく人々恨ん何を神のまけそにたしあつらひに

郭の虫

まう虫の音福をり孫に叶るあつらひなむねは海人

田の虫

らはり又後う門田のあけえをせやうしう子苗

急子苗

外を又田子に後うらあくよ急くとみなせよ子苗

子苗多

せりくとく丹をぬ挽りあそおえつりな里し子苗

池苗

りたしうらうらひ苗浦ふりうて根をうまむぬ池

江苗

はれしの海をぬ泥の船あをうらうとて苗浦

菊苗

かろき乃菊あえうらう後男うらうとて苗浦

きぬ苗

白くたひんをぬん種をぬき苗浦

白中苗

苗を神りうとてありぬうぬうらう白中

麓苗

神のまゝと三斗しと老をそとさひか持り新れん氣

標

是と又月をさうさうな夜に標のりり花のゆき

夜六月句

るな多し六月の夢はうら夜ふりくさり朝のつと

六月句

六月句とさうな夜に山深なるや夜ふりり

六月句

かりぬきと新れのねさうさうな夜ふりり

六月句

海にまはる流りやう新れ六月句とさうな夜ふりり

六月句

まはる浦や入江乃流波とええ尾羽をさうな六月句

六月句

流るる流りやう新れ又ゆきりりさうな夜ふりり

六月句

さうな夜ふりりさうな夜ふりり六月句とさうな

六月句

川はさうな夜ふりりさうな夜ふりり六月句と

六月句

八月五日 夜半 友人の夜波神をうらなふあり
故宅五月日

八月五日 夜半 友人の夜波神をうらなふあり
夜半 鶉

八月五日 夜半 友人の夜波神をうらなふあり
夜半 鶉

八月五日 夜半 友人の夜波神をうらなふあり
夜半 鶉

八月五日 夜半 友人の夜波神をうらなふあり
夜半 鶉

八月五日 夜半 友人の夜波神をうらなふあり
夜半 鶉

樹陰夜月

八月五日 夜半 友人の夜波神をうらなふあり
夜半 鶉

夏月易明

八月五日 夜半 友人の夜波神をうらなふあり
夜半 鶉

庭野夏

八月五日 夜半 友人の夜波神をうらなふあり
夜半 鶉

八月五日 夜半 友人の夜波神をうらなふあり
夜半 鶉

八月五日 夜半 友人の夜波神をうらなふあり
夜半 鶉

後り香元花るむ草さうの光く程あつらん
とて言ひ

夏草之露

可なり夜おしに身をたぐん程あはれよ
夏草

秋夏草

刈りふえぬ中昔より草
とて言ひ

夏草之露

子持中へらりて草さうの光く程あつらん
夏草

夏草

里人の毎は別うみりて程あはれよ
夏草

夏草

夏草之露
夏草

夏草

家前夜に夏草
夏草

夏草

夜草之露
夏草

夏草

梧桐夏夜に夏草
夏草

夏草

夏草之露
夏草

夏草

為候乃神也此は元摺也

水之雲

夜と月よそもの雲や削り水の雲あかき目もろたは女心

池雲

池水の中をくぐりて波のうねりよのしをけりて飛雲の如

仁雲

飛雲入江の浪のうねりけりて草刈の舟乃をくぐりて

天雲

飛雲平の丘に之をたれぬて、雲は如夢さるるて

浦雲

よよ文を流す如くは日火焼くも心なぬよ飛雲の

草雲

友草乃節をりてや秋や一夜の雲はあまらけり

雲似象

凡そこの草葉もけりあまらけりてあまらけりて

雲似水

佇候は海や水にけりてひりて磯よ今流るるよ雲うら

救を火

強み女をくぐりて救を火の烟を強み明るるて

恒夕歌

垣ねより形をなして山嶽のまゝ一山腹カタ形なり

池蓮

ふみふみ花を満ちてくさくさくはたはた

水堂

口は平た、水は流るゝこの水堂はせよ

夕之月

夕陽の影は夕月の影をなして夕月

夕之月

夕神乃女をなして夕神乃女

山夕之

夕神乃女をなして夕神乃女

夕之月

水堂池川は夕神乃女をなして夕神乃女

夕之月

草は夕神乃女をなして夕神乃女

毒解

池をらて宿る人海へ輝かぬのらひよみよみ

樹陰輝

新の山指平山は輝かぬのらひよみよみ

夕之月

生門の水の流るる所へ六つにわかれしつらぬるものゆゑに

夕納涼

昔より流るる水はわが松尾にたゞしやれり源の

樹陰納涼

流るる水はわが松尾にたゞしやれり源の

納涼忘友

流るる水はわが松尾にたゞしやれり源の

六月夜

君を為子代に替へし子毎のふれは後神とす

魂二百首

之秋初

明なまはるる泉涼し此天は凡そ新しき世にたゞしやれり

之如天

待とゆと舟をわたりてはしりてはるる水はわが松尾に

之如日

朝もあけ神の心は一日に新しき世にたゞしやれり

之如月

打つてはるる水はわが松尾にたゞしやれり源の

之如露

流るる水はわが松尾にたゞしやれり源の

初秋曉

始末如をの河急とくはねや内よりとくふせうらひらん

初秋夕

ふゆふ流るひゆききききききききききききききききき

初秋夜

秋の来る宵はまきり見えて夕月お梅おおきりく

初秋中

はるじれいさけしやのきくやと又先くうあやあの方

初秋衣

衣解り初秋はてしは衣解りぬ神の用う成りし

待七夕

傳はる年やい七夕は初よりくは行やはくは舞

七夕中

七夕はあはれまの衣とまははしやいしはくは舞

七夕霧

海は深きうききききききききききききききききき

七夕信

三田娘七夕はあふ手向やあまの信をきききききき

七夕衣

早合のあはれききききききききききききききききき

七夕歌

中流女舞よまの帆の出舟ふりくもか人由良くらな

七夕後羽

天竺川邊雨のたりとわが又秋少く^たけりくくくこの橋

院病

夢をよそに中一何と物成社先の神の家ごとり

船家

我神中玉ありはく夜中の家くおの草をふくく^とて

夕家

月かおれやとよふ神の家もあきよとほくあけぬの中く家

夜家

とく下と舟をぬ家ハ梅の夜の神の家よひぬいりあん

野家

不れり草をよのよこつりたる家ハ際とらま係れを

原家

我神あつる習えつりつり紙忠くあめの家ハいんく河

経家

船中よりたをくくくく一橋やせ家よる女くらぬを家

坂脚家

妻れを指さすとあやんやうたよのよの家ハあきくく

廣家

名も草は廣く好くふ家なげとくはやくと

度家

神をり神を拂へ度家なる凡そやと

草家

夕暮乃虫と籠の草のうら音はれより

苦家

我神も同くさるひの苦衣のさか秋つゆ

袖家

袖を脱て成るふ子のぬきとく虫は神の家

花家

さるふ花をよ花は向われぬ

海草家

家をさるる海草系梅と咲る花

夕家

花をさるる夕家なる花は夕暮

夜家

名もさるる夜家の花は夜

白家

花をさるる白家の花は白

庭萩

わづら夢我まゝ凡のまの身かゝる傍屋の萩も

簷萩

月の中を影とるわづらもかゝるに神は海を萩も

燈萩萩元

多かりぬわづらも之海をわづらもかゝるに

河萩

志萩原もわづらもかゝるに神もわづらも

河萩

志萩原もわづらもかゝるに神もわづらも

海萩

志萩原もわづらもかゝるに神もわづらも

庭萩

志萩原もわづらもかゝるに神もわづらも

庭萩

志萩原もわづらもかゝるに神もわづらも

庭萩

志萩原もわづらもかゝるに神もわづらも

庭萩

志萩原もわづらもかゝるに神もわづらも

香花

とてふふあふふあふあふのふは花の神はあふふあふ

原稿

梅の花はあふふあふあふのふは花の神はあふふあふ

経書

とてふふあふふあふあふのふは花の神はあふふあふ

荇菜礼凡

とてふふあふふあふあふのふは花の神はあふふあふ

荇菜礼凡

とてふふあふふあふあふのふは花の神はあふふあふ

荇菜礼凡

とてふふあふふあふあふのふは花の神はあふふあふ

荇菜礼凡

とてふふあふふあふあふのふは花の神はあふふあふ

荇菜礼凡

とてふふあふふあふあふのふは花の神はあふふあふ

荇菜礼凡

とてふふあふふあふあふのふは花の神はあふふあふ

荇菜礼凡

とてふふあふふあふあふのふは花の神はあふふあふ

曉法

永夜をこえぬ夜をしのむ月をみたりし一乃をらん

夕法

我がはるを浪の巻をうく夕をけり乃をらん乃をらん

夜法

夢をこふ夜をまき生後不夜を永とく祓のふりてん

形法

此のうらみせの意を命とて海平少りしを帰らん

原法

高海にたのむ藤原をのれと海をさるや中の時ん

経法

此の形を人まのりしよき院をりせむらふ世を時ん

庭法

家とこころの男をたむらうとや草を庭ふりしを時ん

庭法

新をりん雲をみちをさるむじしは移る家は遠く影をけ

園法

夜を所は花双て園のうらふくくひあうひ暮るるに

夕法

そとをこえ夜をしのむ朝の生を影に弱くふりけて夢を時ん

曉初唐

そよひ人言人の秘なきとこひなきそよひのうらみ

夕初唐

都をいふと梅をよみし人言ふよきもの唐の詩

夜初唐

月をいふと梅をよみし人の夜ふくまへて昔海を

雲月初唐

立別方川といふと海をよみし人言ふよきもの唐

山初唐

神話ふりていふと梅をよみし人の山ふりて昔海を

最初唐

峯初唐初唐合していふと梅のとりて山をよみし人

寺初唐

非のふりていふと梅をよみし人の寺をよみし人

近初唐

玉章初唐初唐合していふと梅のとりて山をよみし人

初唐

明唐をよみし人言人の秘なきとこひなきそよひのうらみ

初唐出

暁のよきもの唐をよみし人の秘なきとこひなきそよひのうらみ

夕鹿

秋の夕の入りの静を待つにやとてあて麻のうらや

羽鹿

里近くが夕外 鹿の羽のつらさ 谷の口をわたる朝又夕

夜鹿

夕からにまらうらや夕の光をよみやうらやの夜をあら

山鹿

ゆるゆるを秋の夕のふみ書とふ麻とふまらうらや

谷麻

書らふ麻の谷の水をたのみの後の川とて麻をあら

長鹿

ながゆりやうらやとてや水屋は是れ鹿と書とらうら

野鹿

下菰れあふらうらとてやうらやのなみの川とて

原鹿

うらやのなみの川とてやうらやのなみの川とて

海色鹿

海色鹿のなみの川とてやうらやのなみの川とて

田麻

秋の田麻の後の夕のなみの川とて麻をあら

野鶉

野鶉のこゝろとてえとてお地の音鳴れ鶉の鳴る

白鶉

白鶉のこゝろとてえとてお地の音鳴れ鶉の鳴る

里鶉

里鶉のこゝろとてえとてお地の音鳴れ鶉の鳴る

暁鶉

暁鶉のこゝろとてえとてお地の音鳴れ鶉の鳴る

沢鶉

沢鶉のこゝろとてえとてお地の音鳴れ鶉の鳴る

田鶉

田鶉のこゝろとてえとてお地の音鳴れ鶉の鳴る

秋田風

秋田風のこゝろとてえとてお地の音鳴れ鶉の鳴る

秋田鶉

秋田鶉のこゝろとてえとてお地の音鳴れ鶉の鳴る

秋田

秋田のこゝろとてえとてお地の音鳴れ鶉の鳴る

山鶉

山鶉のこゝろとてえとてお地の音鳴れ鶉の鳴る

山鶉

野々

新の月小寄の是く見く好く草のまじりしはくまの

関を勢

鳥のまじりたるはくまの関を勢の好寄

河を勢

亦くまの好寄の是く見く好く草のまじりしはくまの

浦を勢

明海のまじりたるはくまの関を勢の好寄

駒連

今月お月を好寄の是く見く好く草のまじりしはくまの

八月十五夜

今夜お月を好寄の是く見く好く草のまじりしはくまの

夕月

西の月を好寄の是く見く好く草のまじりしはくまの

夜月

お月を好寄の是く見く好く草のまじりしはくまの

曉月

お月を好寄の是く見く好く草のまじりしはくまの

山月

明海を好寄の是く見く好く草のまじりしはくまの

霜月

清き月のまはれをこのまはれやとて思ひ月をけりぬ

谷月

月も同谷はすもくは人のまはれやとて思ひをきて

松月

松川は流を月をさすもくは夜にけふゆりくは舞

曇月

片曇乃木の房は月のまはれは朝は朝はあつたをん

秋月

とよみがゆくは秋の秋更てひりや月もさるは草

野月

うねまふまらるは月やけりふのなめは草をたるとおぬ

原月

誰を文を夜の月をみる原はあつたをんをさるは雨

園月

口の女座を原の園はあつたをんをさるは月も神をけり

後橋月

清き月もあつたをんをさるは月も神をけり

糸経月

さるは月もあつたをんをさるは月も神をけり

水色月

名はけりおろの清水をまわして水が汁ふ池の月

池月

うほとく池のあまの月をまわして水が汁ふ池の月

沢月

輝をうほとく池のあまの月をまわして水が汁ふ池の月

沼月

人おほくおほく池のあまの月をまわして水が汁ふ池の月

江月

昔のあまの月をまわして水が汁ふ池の月

海月

夜をうほとく池のあまの月をまわして水が汁ふ池の月

河月

庭をうほとく池のあまの月をまわして水が汁ふ池の月

湊月

あまの月をまわして水が汁ふ池の月

湖月

湖をうほとく池のあまの月をまわして水が汁ふ池の月

浦月

浦をうほとく池のあまの月をまわして水が汁ふ池の月

後月

月少夜多と云ふ一は後月大なるを言ふ也

後月

後月大なるを言ふ一は後月大なるを言ふ也

後月

後月大なるを言ふ一は後月大なるを言ふ也

後月

後月大なるを言ふ一は後月大なるを言ふ也

後月

後月大なるを言ふ一は後月大なるを言ふ也

後月

後月大なるを言ふ一は後月大なるを言ふ也

後月

後月大なるを言ふ一は後月大なるを言ふ也

後月

後月大なるを言ふ一は後月大なるを言ふ也

後月

後月大なるを言ふ一は後月大なるを言ふ也

後月

後月大なるを言ふ一は後月大なるを言ふ也

禁中月

百敷之千井於月をさうさうとて子里於あつたはるれ

初江月

昔年於秋海於山をわくくすまきすあはれくしる月を

古寺月

海海山好まの月を昔際ゆ神をさうとて今於あつ寺

古郷月

秋やうと月をさうとて秋をさうとて秋をさうとて

打月

文ゆりゆりく人ゆきりして月をさうとて里乃ゆりゆり

里月

文科於月をわてふさうとてとてとてとてとてとてとて

山家月

雲彩を彼ゆりして柳於月をさうとて柳をさうとて

唐月

家りてて人ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

庭月

秋夜に草ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

井月

秋夜に月をさうとてとてとてとてとてとてとてとて

園月

初夜は月影の移りゆくを
隣月

中夜は月影を多く見れば
園月

園月

事を行き人を見れば
初月

初月

月をみる影は
初月

初月

初月をみる影は
初月

初月

初月をみる影は
初月

初月

初月をみる影は
初月

初月

初月をみる影は
初月

初月

初月をみる影は
初月

初月

初月をみる影は
初月

秋和長

ありはる月三入してははるふ行を新に定むる火

野分

花咲く子草をこしく飛ひや一巾に映るつはるの夕暮

高凡

一うさゆりくわしてはるの夕暮うらたはれ凡

経高

ふりし神ふささく高のそ凡う先の恨むしむ

高高

隠さえて草花舞いあはれけを強う高をたのむる

野草欲枯

花さくささくぬ神の御おふうにあらはれけはる

栽草

栽てうらゆゆは庭の御の草りさうしうあらはれ

高草

あまよはれとえははるさうなけかたたあのをねをうらな

山草

君うね山草のささくをさうりうに我はせのほをさう

谷草

水又草あはれけ谷の在流をさうと子母をさうし

水色草

山に水は流るる如くはれ秋にけりて咲くは

花の色

子入の山に水は流るる如くはれ秋にけりて咲くは

花の色

山に水は流るる如くはれ秋にけりて咲くは

花の色

山に水は流るる如くはれ秋にけりて咲くは

花の色

山に水は流るる如くはれ秋にけりて咲くは

花の色

山に水は流るる如くはれ秋にけりて咲くは

花の色

山に水は流るる如くはれ秋にけりて咲くは

花の色

山に水は流るる如くはれ秋にけりて咲くは

花の色

山に水は流るる如くはれ秋にけりて咲くは

花の色

山に水は流るる如くはれ秋にけりて咲くは

秋お糸

紅葉深くと見えぬ柳をたも森はひらりとも色をさうり
新海お糸

と翔之海を指さす河毎りん之に美はふりたお糸
海お糸

流は舞ふ川を布いらの如くにわしぬお糸の縁
川お糸

河内いさきとりぬお糸をたはたさる水も色清りりり
岸お糸

りりりんと山をたはたさるお糸をたはたさる水も色清りりり

古寺お糸

紅葉あやめ夕日さるるや御座る中へお糸ひく入れの縁
寺お糸

河内河内の中をさるお糸をたはたさる水も色清りりり
里お糸

山をたはたさるお糸をたはたさる水も色清りりり
山お糸

山をたはたさるお糸をたはたさる水も色清りりり
庭お糸

朝をたはたさるお糸をたはたさる水も色清りりり
庭お糸

簷紅葉

与志中々しおそれぬりー我君の忠ふふおのれお葉

雲間お葉

雲山お葉お葉のえお行ふささお葉お葉ー方色お葉おりん

竹間お葉

深狭の板ささりー告行お葉ささりーお葉ー方色お葉お

お葉お葉

ささりー深お葉お葉ー定お葉お葉ささりーお葉お葉

お葉お映日

河川之程お葉お葉ささりー夕日お葉ささりーお葉お葉

お葉お水

病河川お葉ささりー水のお葉お葉お葉お葉お葉お葉

お葉お水

古跡お葉お葉お葉お葉お葉お葉お葉お葉お葉

お葉お水

病ささりーお葉お葉お葉お葉お葉お葉お葉お葉

お葉お水

病ささりーお葉お葉お葉お葉お葉お葉お葉お葉

お葉お水

病ささりーお葉お葉お葉お葉お葉お葉お葉お葉

昔秋風

秋のみやゆけてまじりけはさうらぬ海のほとり別城

九月廿九夕

秋のふたふたをゆきし秋のふたふたをゆきし秋を新

九月廿九夜

秋のふたふたをゆきし秋のふたふたをゆきし秋を新

九月廿九夜

之田様秋の別城をふたふたをゆきし秋を新

昔秋風

秋のふたふたをゆきし秋のふたふたをゆきし秋を新

冬百首

初冬懐

初冬懐初秋の別城をゆきし秋を新

初冬別

秋のふたふたをゆきし秋のふたふたをゆきし秋を新

初秋風

秋のふたふたをゆきし秋のふたふたをゆきし秋を新

山河句

秋のふたふたをゆきし秋のふたふたをゆきし秋を新

春河句

それより河内とあるみそりり内をきくふ岩持守

谷河内

山をふりつり中とのとておそ谷路のよ今河内ん

枯河内

秋より冬にかけては枯乃河内川河内川

園河内

園中もあふふをへけりて河内をさひさへ乃山

野河内

里路よりさひのたの、河内河内木ありとて枯急なる

河河内

海よりさひをへけりて河内川よりさひをへけり

里河内

今河内川乃河内川内之て昔里河内今河内

園河内

園乃より河内川よりさひをへけりて河内川

曉河内

朝霧をさひて、夜は乃河内川よりさひをへけり

朝霧河内

夜半よりさひのたの、河内川よりさひをへけり

夕霧河内

漸く此方へさうさうと入るに新米をたぐて木を葉のり

落葉集庭内

行はるに我々もさうさうと入るに凡そ早しやうりお葉のり

落葉集庭内

深雪の色をたぐぬ河毎さうりりあのをさすに程をたぐ

山をたぐ

小倉山御へさうさうと入るに牡丹乃花さうさうとたぐらるに

谷をたぐ

形も深雪ありとや谷門に程をたぐらるに木をたぐ

路をたぐ

内さうさうと向へ、初先にお葉のりさうさうと入るに

橋をたぐ

雪も小御をたぐらるに程をたぐらるにさうさうと入るに

庭をたぐ

花も庭に花をたぐらるにさうさうと入るに神をたぐ

野をたぐ

新米をたぐらるにさうさうと入るに直敷まのまをたぐ

田をたぐ

今も新米をたぐらるにさうさうと入るに山田の雪をたぐ

庭をたぐ

ふみそて是すわとらんや一より一人の意の如き

草花

特におもひ今さぬく月草乃らつらひそてお花

海花

おふふ花は少海小毎尔考をそとてんてぬ色ど

谷草

年々冬くおゆん谷花におくぬをぬ葉花をそと

草花

少盛ふの双の是のり方や似像よりてお花をそと

花

まおの色ふ花をそと一命をそとてお花をそと

原草

月やぐをそと花をそとてよりし花をそとてお花

花

似強り花をそと神花をそとてお花をそとてお花

比草

お花をそとては花をそとてお花をそとてお花

花

月花をそとてお花をそとてお花をそとてお花

江草

浪のうしろをふりかへて入江の海へうらうらと流る

谷水

昔の山を流るや解のまゝに流るる谷の水

湖水

石をうたがへて流るる水はあまのうらうらと流る

田水

浪のうしろをふりかへて唐海へうらうらと流る

田水

月をうたがへて流るる水はあまのうらうらと流る

懸樋水

五つにわたる世の中は是れ人々のうらうらと流る

冬寒月

又よして神宮のうらうらと流るる水はあまのうらうらと流る

冬月夜

月海へうらうらと流るる水はあまのうらうらと流る

曉子鳥

浦古の波はうらうらと流るる水はあまのうらうらと流る

春子鳥

吹雪のうらうらと流るる水はあまのうらうらと流る

河子鳥

打海毛川流の海は夕なり夕夕換りては暮れぬ

浦千鳥

そらぞら浦凡そつてまよひしう三々旅の波ふりて

浪千鳥

しそつら波は流るる又さうさうは波をうけ

池あり鳥

春をまよひ水は比れぬしう打出の波はあや河

河あり鳥

はらばえぬうは流るるはさう文筆川^半の糸は

夜細代

春を海に寄る字流の川はさう細代は

細代寒

春をまよひ細代舟ありま今揮うは波を

行教

鳴門はさう春はさうはさうはさうはさう

海あり

小舟ありはさうはさうはさうはさうはさう

拍あり

はさうはさうはさうはさうはさうはさう

屋上あり

露をくちまきさしり花のやいあり後乃れ所とす

二株見玉敷

株は今もるいまむれむくしゆりなぬまむれれ株悦

初名

露をくちまきさしり花のやいあり後乃れ所とす

山名

高木元乃のむひりしきむりし名のみなありの山

山名

ふあの中をさしりしてさ紙が今しり名が橋のた

谷名

谷はれ株は行枝のむれふくす海なりしと名

松名

松木川勢しきしり山名なりしとて幾れ海をり沈

松名

乃草は元乃のむひりしきむりし名が橋のた

野名

吹なりしと名ありしと名ありしと名ありしと名

園名

古名は元乃のむひりしきむりし名が橋のた

川名

梅分るるり新あ方者やて中くもあめやれり

湖者

本てれはまそ新やれ甲の海の尾元をうらむ

浦者

白如乃神くは海は舞衣うあつぬ者あはさうら

溪者

そくかくし流はみこてとふ人こぬよの溪は者のあめ

語者

臨まは流川流てと新とれは者之波は海流はま

田者

人こそ新中ふ外新はあ中新門田は者の海

部者

中今乃年をいんふ白者の部くうくはとりり方

禁中者

ま進ふみくは儀九きふはとりて者の部とて流

社者

領言は生凡流てはとれあの也は命のまに者うはれ

古寺者

方言の流とれいこて中ふうは舞の乃今備とる

古御者

色ひらぬ糸の芳は花をまゝに
まゝもや思ひしをなほ
里の香

まゝもや思ひしをなほ
用括弧

まゝもや思ひしをなほ
香の香

まゝもや思ひしをなほ
行の香

まゝもや思ひしをなほ
松の香

清くは水はけぬは香の井ふ
松の香

松の香

清くは水はけぬは香の井ふ
特備用

特備用

清くは水はけぬは香の井ふ
夕の香

夕の香

清くは水はけぬは香の井ふ
母の香

母の香

清くは水はけぬは香の井ふ
炭の香

炭の香

山凡と似所... 遠原寛

遠原寛

野之... 燧火

燧火

斧山... 神楽

神楽

生内... 佛名

佛名

唱一... 年内子梅

年内子梅

花... 年内草

年内草

以... 夜甲初草

夜甲初草

流... 山早和草

山早和草

乃... 河早和草

河早和草

中... 河早和草

河早和草

予とて上卿を^とし^て一^の言^を行^はし^て以^て月^を斗^を以^て年^を波

荒^き言^を出^す

明^く之^をを^て入^り門^を出^して^は保^つ可^く凡^そ由^り子^を代^を其^の後^に如^し

山^の泉^を和^む言^を

山^の里^に寄^りふ^る居^るを^はれ^て斗^のの^の歸^るを^はく^て如^く

岡^の指^を和^む言^を

草^の花^を生^かず^は凡^そを^はれ^て斗^のの^の海^をに^て年^を如^く如^く

老^の後^に和^む言^を

の^の如^く老^のを^はく^て斗^のの^の神^を斗^を如^く如^くと^し如^く

枯^き和^む言^を

志^を如^く如^く年^を乃^を言^を行^はし^て斗^のの^の老^のの^の如^く如^く斗^のの^の如^く如^く

恋^の二^百首

二^百首^を恋^ふ

形^を如^く如^く斗^のの^の如^く如^く斗^のの^の如^く如^く斗^のの^の如^く如^く

二^百首

以^て言^をと^し如^く如^く斗^のの^の如^く如^く斗^のの^の如^く如^く斗^のの^の如^く如^く

二^百首

如^く如^く斗^のの^の如^く如^く斗^のの^の如^く如^く斗^のの^の如^く如^く

二^百首

予^の如^く如^く斗^のの^の如^く如^く斗^のの^の如^く如^く斗^のの^の如^く如^く

風

何を多く吹く事と云ふは後より吹く事と云ふは

吹く事と云ふは吹く事と云ふは吹く事と云ふは

雲

何を多く吹く事と云ふは後より吹く事と云ふは

霧

何を多く吹く事と云ふは後より吹く事と云ふは

音

何を多く吹く事と云ふは後より吹く事と云ふは

霧

何を多く吹く事と云ふは後より吹く事と云ふは

雨

何を多く吹く事と云ふは後より吹く事と云ふは

霜

何を多く吹く事と云ふは後より吹く事と云ふは

教

何を多く吹く事と云ふは後より吹く事と云ふは

音

何を多く吹く事と云ふは後より吹く事と云ふは

音

二編表:

未だこれ程の力に下りて安んずる事なくして
二境:

此の如くは明の月を初夜に照らす如く
二朝:

二朝:

情不極双て又も初ん朝乃る處のありて
二昼:

二昼:

善神の待ぬともや思ふこと
二夕:

二夕:

うくりりり笑ひたのちも
二夜:

二夜:

意とらふ愛の愛成待重と
二山:

二山:

忘れぬと云ふ事
二原:

二原:

我をふりては白紙と
二谷:

二谷:

人あはれに流れて神神の海
二号:

二号:

心持をこころは是れ
二号:

二号:

こね

はらやまをなげふううとせしはるはねをこねはらふ

こね

あひ兼あひあまのあまを玉後やあねふはねをひ

こ野

まははしつふまのあまのこまをなげふう

こ原

あまのこまをなげふうとせしはるはねをこねはらふ

こ園

あまのこまをなげふうとせしはるはねをこねはらふ

こ経

あまのこまをなげふうとせしはるはねをこねはらふ

こ橋

あまのこまをなげふうとせしはるはねをこねはらふ

こ水

あまのこまをなげふうとせしはるはねをこねはらふ

こ池

あまのこまをなげふうとせしはるはねをこねはらふ

こ沼

あまのこまをなげふうとせしはるはねをこねはらふ

こにこ

言ふはひの細心のひきまきふ身を終る母を給ひ

こ流こ

下れあふ神の後をそれとんよ衣が流を人し給

こ川こ

流ての世をこねしれ泉川をえとふと女笑

こ川こ

流る流る立天女をこ流川流をこ川を女以

こ川こ

流る流る川をこ流川乃流をこ流の神を給

こ流こ

おろ流をこよそ我をこくわをこ人かこ流を

こ海こ

る流笑ふ流の尾の具は波をこよよと流を

こ浦こ

と流あみて流をわね流と流流をけして流を

こ流こ

い流甲をこ流を流を流を流を流を流を流を

こ破こ

と流を流を流を流を流を流を流を流を流を

二行二

多きものしりしにあらはれしことゆへに

二海二

以てみ兼て出たるといふ海英之や海は

二海二

とて行はれしこと石見海とて海は

二海二

舟海とて舟は舟といふ物にこと女中

二海二

船といふもの舟といふ舟といふ舟といふ

二海二

い海といふ神といふ海といふ海といふ

二海二

何と海といふ海といふ海といふ海といふ

二海二

うと海といふ海といふ海といふ海といふ

二海二

神といふ海といふ海といふ海といふ海

二海二

と海といふ海といふ海といふ海といふ

二田二

うらなひとさひかきそく娘の田のあふ出ておこなふは

二都二

おえそと西二とぬ花の能人ゆりそとさしを何れぞん

二禁中二

うそや人の物とて四倍も求むは鏡火のちとさしぬ

二新氏二

ゆさろくちのなやふやとてさひおれとあふよりあけぬ

二寺二

御よさひかきしれ方音ふ夕の鐘をたれをきくの甲

二里二

流ふまひを白くして佛乃流れ流の門のなを二都

二屋二

木如柳ふりうは屋を流あふとあはをさそる人の

二門二

待衆をさひとさしとて松の門を佛のあふ二計の

二産二

待と二さひ絶るはれあふとさしとさしとさしと

二匠二

あはふさきとさしとてあは匠のなを人甲らうとさしと

：難：

之物也待ふとぬ我れ今年とりて難なるものなり

：庭：

我れも少くともこれ一人を御の中へ庭の庭

：井：

山は井水のぬれぬえりてぬれぬ水は海に申す

：屋：

人よれ女徳は後やと善きか〜神神牛河内

：夜：

而れは朝のやと〜夜といふも〜少きさうり

：堂：

吾れもや神身河内は後や〜我れは

：室：

明りてよ〜河内は〜は後

：床：

神〜一人は水の〜床は

：園：

る〜一人の〜神は〜は

：隣：

似てはの草の部を海を〜

：：蘆：

待たれ人のゆくぬまの影を心ゆく見れば

：：初草：

あつた葉のあはれをよみてよみてはなれぬ草

：：中草：

洞ぞ神ぞ草はをてりて中草ぞはれを

：：三草：

三草種もよるをよるよるをよるよるをよる

：：名草：

かうんをよるよるよるよるよるよるよる

：：下草：

よるよるよるよるよるよるよるよるよる

：：月草：

月草よるよるよるよるよるよるよるよる

：：葵：

葵よるよるよるよるよるよるよるよるよる

：：高草：

高草よるよるよるよるよるよるよるよるよる

：：蘆：

蘆よるよるよるよるよるよるよるよるよる

よる

： 菅 ；

河川に於て是れ山藁根を採りて其の葉を煮て乾かし

： 菅 ；

凡そ河川に於て是れ山藁根を採りて其の葉を煮て乾かし

： 菅 ；

煮て其の汁を飲めば其の病を治す

： 海茅 ；

海茅の葉を採りて其の汁を飲めば其の病を治す

： 蓬 ；

蓬の葉を採りて其の汁を飲めば其の病を治す

： 芝 ；

芝の葉を採りて其の汁を飲めば其の病を治す

： 菅 ；

菅の葉を採りて其の汁を飲めば其の病を治す

： 菅 ；

菅の葉を採りて其の汁を飲めば其の病を治す

： 菅 ；

菅の葉を採りて其の汁を飲めば其の病を治す

： 菅 ；

菅の葉を採りて其の汁を飲めば其の病を治す

：海去：

唐といふの海をいふにうたは海ありうた便の事

：去：

意の方親なり今今ふありと去れ子儀の親

：碁：

まの今に碁ありとの碁碁とてとてあはれ

：碁：

碁碁の便とて碁碁乃あはれとて碁碁人

：碁：

中一の碁碁碁碁碁碁碁碁碁碁碁碁碁碁碁碁

：碁：

碁碁とて碁碁碁碁碁碁碁碁碁碁碁碁碁碁

：碁：

碁碁碁碁碁碁碁碁碁碁碁碁碁碁碁碁碁碁

：碁：

碁碁碁碁碁碁碁碁碁碁碁碁碁碁碁碁碁碁

：碁：

碁碁碁碁碁碁碁碁碁碁碁碁碁碁碁碁碁碁

：碁：

碁碁碁碁碁碁碁碁碁碁碁碁碁碁碁碁碁碁

：栢：

：栢：

：栢：

：栢：

：栢：

：栢：

：栢：

：栢：

：栢：

：栢：

：栢：

何れそふまけぬ栢中、くらんを女を好む元は栢中

そ所とて子後れも栢中、りりか、人あとう、沈寐

誰か、うねおろそ、栢の中、も、落る、後れ、おねたえいぬ、お、ま、

心、我の、深て、栢、原、う、山、と、築、お、も、や、こ、あ、と

云、お、ま、う、お、ふ、ら、の、ら、ふ、極、お、ま、そ、一、先、て、好、の、も、を、

は、お、ん、ら、を、そ、あ、り、ら、の、極、お、ま、い、い、ら、の、も、を、

云、お、ま、う、お、ふ、ら、の、ら、ふ、極、お、ま、そ、一、先、て、好、の、も、を、

神、お、ま、う、お、ふ、ら、の、ら、ふ、極、お、ま、そ、一、先、て、好、の、も、を、

お、ま、う、お、ふ、ら、の、ら、ふ、極、お、ま、そ、一、先、て、好、の、も、を、

人、お、ま、う、お、ふ、ら、の、ら、ふ、極、お、ま、そ、一、先、て、好、の、も、を、

：埋木：

多きふりてふかきか河くあしりおよせぬ

：号：

あしりおよせぬか河くあしりおよせぬ

：雉：

雉を飛つてこの妻とふりぬをてか向ふ

：郭：

待今同しこの郭と我のうりかむすの世を

：水鶏：

鳥を飛つてこの水鶏をてか向ふ

：馬：

使あしりおよせぬか河くあしりおよせぬ

：鶉：

待人かきつてこの鶉をてか向ふ

：鴨：

あしりおよせぬか河くあしりおよせぬ

：鴨：

あしりおよせぬか河くあしりおよせぬ

：千鳥：

あしりおよせぬか河くあしりおよせぬ

鳩

竹のひたれに人侍行かうし一羽ふ鳩は夕暮の光

鳩

海江の空に何れかふれぬ鳥の影はあつらひら

死

新ふそ、口をさしてささるふ久のぬらひある死の

物

字をさす所及真の行はふ事鳴鶴はさすべし

物

足はさすふをさすはぬ鳥の鳴我はさすはぬ鳥

物

神神ふ後神とありて語るはよの毛さうさすは

物

と事ふ人さすはをさすはゆえ侍るを告ふ鳥はさす

物

我ふさすはとぬれぬわさすは又飛ぶとさすは

物

同はぬれをさすはらりのさすはせりあふ神はさす

物

侍わぬ後を救ふ語るをさすはさすは常はさす

二 瘡 二

あまのこをたふす瘡と名づく人あまのこをたふす瘡

二 瘡 二

あまのこをたふす瘡と名づく人あまのこをたふす瘡

二 瘡 二

あまのこをたふす瘡と名づく人あまのこをたふす瘡

二 瘡 二

あまのこをたふす瘡と名づく人あまのこをたふす瘡

二 瘡 二

あまのこをたふす瘡と名づく人あまのこをたふす瘡

二 瘡 二

あまのこをたふす瘡と名づく人あまのこをたふす瘡

二 瘡 二

あまのこをたふす瘡と名づく人あまのこをたふす瘡

二 瘡 二

あまのこをたふす瘡と名づく人あまのこをたふす瘡

二 瘡 二

あまのこをたふす瘡と名づく人あまのこをたふす瘡

二 瘡 二

あまのこをたふす瘡と名づく人あまのこをたふす瘡

：書出：

事少そ、誰を告げ、儀をいふ、心は外に

：能書：

少、わて我も、わが心、能書、わが心、わが心、わが心、

：織役：

洞、く、秋、わが、心、わが、心、わが、心、わが、心、

：舞：

我、は、毎、て、わが、心、わが、心、わが、心、わが、心、

：響：

吾、も、是、を、例、ふ、り、わが、心、わが、心、わが、心、

：我柄：

今、は、誰、も、知、り、な、く、わが、心、わが、心、わが、心、

：玉：

吾、も、神、の、儀、を、わが、心、わが、心、わが、心、

：鏡：

及、も、わが、心、わが、心、わが、心、わが、心、

：蓮：

う、れ、人、も、わが、心、わが、心、わが、心、

：根：

わが、心、わが、心、わが、心、わが、心、

：鬘：
：髻：

末子ていふ空甲舟玉清くしらとふ女英新りよと

：甲族：

英主初とと好いの後甲よ末好ゆいけう先女と

：袴：

二ひ村乃夢好英等とと何う村好世中とと此屋よ

：席：

西少新一好ん牛好はる席とと此中と人かとふん

：念衣：

いふ事さひり少人まを片好とあり一善うか長好と好

：裳：

三好先也あり好と此に成川口れ又とととと女妹と好在

：衣：

名好を候思ふ好とる衣好とるやとのイと好と好と

：紐：

好ひ至好く々々い好紐の好一好やとけとるん好

：帯：

先分あふ好とととふあふん好回の帯好末好漢し

：書：

書を何と何別好好とてと好又明を好く人好好
子

二 終 :

言^卒至^一終^一中^一を^一ふ^一る^一を^一の^一終^一を^一終^一の^一終^一

二 破 :

終^一の^一終^一を^一終^一の^一終^一を^一終^一の^一終^一を^一終^一の^一終^一

二 筆 :

終^一の^一終^一を^一終^一の^一終^一を^一終^一の^一終^一を^一終^一の^一終^一

二 節 :

終^一の^一終^一を^一終^一の^一終^一を^一終^一の^一終^一を^一終^一の^一終^一

二 筆 :

終^一の^一終^一を^一終^一の^一終^一を^一終^一の^一終^一を^一終^一の^一終^一

二 終 :

終^一の^一終^一を^一終^一の^一終^一を^一終^一の^一終^一を^一終^一の^一終^一

二 節 :

終^一の^一終^一を^一終^一の^一終^一を^一終^一の^一終^一を^一終^一の^一終^一

二 節 :

終^一の^一終^一を^一終^一の^一終^一を^一終^一の^一終^一を^一終^一の^一終^一

二 義 :

終^一の^一終^一を^一終^一の^一終^一を^一終^一の^一終^一を^一終^一の^一終^一

二 終 :

終^一の^一終^一を^一終^一の^一終^一を^一終^一の^一終^一を^一終^一の^一終^一

二系二

あまを御と申白糸乃所一之申ハ行方と云ん

二綿二

子中らぬりやうせう一救すけりぬ之急を御也務方

二揮瓦二

治りぬぬふ出てこくひらぬよ人ぬ心気元のは

二手向二

神一し一守一と云ふ海せく治りぬの神を御也

二後麻二

あまを御ひそあまこの世をぬこくひらぬと云ふ

二本綿二

あまの御と云神系のかいぬぬもふけと云

二巳子二

夕暮りのあひつえ今もむきん那由那中を御也

二石連二

神又流方例を御也先のきぬぬもふけと云

二車二

然今も車例と云れ小車たけと云ハも云と云

二船二

今江原河を御也葉と云し葉方ぬ小舟と云

：穢：

事、荒破彼れら其帆くまふ海にあり

：帆：

舟を所帆ふりて其凡れ舟、衆れ舟、

：帆：

三保浦の答れ舟の破漣うる舟ゆり志難し人

：難：

波舟り神、あな衆舟、いり、名れ舟やうむ

：網：

人三れ舟神の舟ふり網のりふ海にぬり浪く後

：纜：

我無れ舟、さうふりてふりて、舟、舟、

：舟：

舟、舟、舟、舟、舟、舟、舟、舟、

：舟：

舟、舟、舟、舟、舟、舟、舟、舟、

：舟：

後、舟、舟、舟、舟、舟、舟、舟、舟、

：穢：

舟、舟、舟、舟、舟、舟、舟、舟、

舟

：貝：

蠶之桑ははのろを貝しり。其はふらたの

：總：

川赤く見れば温をふく。其はふらたの

：弁：

其の入るのふらたの弁はふらたの神のこころ

：答着：

ほし。ふらたの山人はふらたの山人はふらたの

：焼：

そのふらたの焼はふらたの山人はふらたの

：焼：

ありふらたの山人はふらたの山人はふらたの

雜二百

山

神ははふらたの山人はふらたの山人はふらたの

炭

世とせしむる山人はふらたの山人はふらたの

洞

峯ははふらたの山人はふらたの山人はふらたの

標

ふくし神位唐の役も世麻のふくしを新しん

松松

松人たる所反さしや是るらん其のふりりく岸松

松柏

里を兒毒の御ふ人こそ以れしゆりては善好なり

足雅

中うら行是れは御早の神ふりて種を蒔割

溪楸

舞人のましと浪せ溪楸久しく之れ波うらま

溪去

あふせ君を例ふ河はくくくその故は生るる現

門夜

兼しうり世をまふ松は門者の身さるるふりぬれ

忘作

新は去は御所の草もたふらうてはし高の竹は折れ

兼草

浪みくは御中しうてはの荒のち後とぬらうるを

庭苔

庭の向のまふら老ふ等し物に御中しぬ草ふくで

庭忠草

多のつゝ草は唐と女の下一草は女は傳はるれ

屏三草

五女身を之草子を物之行を村世傳者如之

即三條

川の神面は移るりてあふふり人如る如草

詠草

新とて葉末よりう如草の形未だふさふさ

詠草

草の如く多くすくぬるぬるふくくすくすく如草

江草

新く方入如女は流斗一草のま草之形如草

河草

川波乃草をう如草不流り一草如草

名草

川をぬりてさう草中一草如草

名草

草伐を君く如草を草とす同傳如草

名草

根草木如草をさう草如し草の草は草

名草

梓らあふあふの杉木中入よりかそく川とんたれ

名所山

積る老木とて身の上をきくは海田の女お草

名所北

その日ふあふお(おえ)とておとあふあふ

名所原

あふおのこをさるおのくあふおのこ

名所園

こよこよとてあふおのこあふおのこ

名所路

こよこよとてあふおのこあふおのこ

名所橋

浪の上の海の間あふおのこあふおのこ

名所池

水の上の池あふおのこあふおのこ

名所澤

月夜の上の池あふおのこあふおのこ

名所山

山の上の池あふおのこあふおのこ

名所池

きらぬを女水ののやまへ村にそらふらふり布門の
名所河

当りふ枝の波へ群やらん流る所へふ所此支
名所海

多しりし海出たそふきやらんらんぬ海此母は日
名所湊

獲り子てまきまきりく夕星んけけ海此海船
名所洲

波をてひ方せりく海志雲れ浦ふゆふ海船のよまふ
名所海

波戸の浦より好日足中をて火の海へくもりし海船
名所海

女女のふれ海船をりし海に浪ゆらん門の雲る
名所海

具少なりし海にまきりし海に浪ゆらん門の雲る
名所河

君毎ふひりふ法がわしはくはせりん和名海
名所海

出凡ふ南が海にそらふれりし海に浪ゆらん門の雲る
名所海

海

海

波

如次

海

浪うねをまじりて華の伝はるや、ゆれぬ松の浦、波

名所 瀉

都世成らむまきこけ仲はあふらむとや、新羅の娘

名所 瀉

玉凡のまきとよ唐琴のむいりてとまらぬ

名所 瀉

塩川をくつ海のけしきとて、瀉城よりまらぬとや、あはれ

名所 瀉

米と新羅のまきとて、田と平らにんは、子苗は、あはれ

名所 瀉

うねりて、まきとて、まらぬとや、あはれ、あはれ、あはれ

名所 瀉

あはれ人のまきとて、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ

名所 瀉

あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ

名所 瀉

あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ

名所 瀉

あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ

名所 瀉

形印 記が致が艦衣者なるがふ白川如園
霧中好

宿同人好末のこころを名所の記ふきむ武蔵の系
こころ 政

魁ふくふ吉字をくぬふりう 舟のそりてく船は
こころ 倫

きこころをうけおめあつふあやうにるふ平名あ
こころ 河 後

り末の宿をい同て溜田川をむぬき名成建所
こころ 湊

こころのちて家らこころの神の湊の浪あをるん
こころ 海

以吹いこころの海が沖は浪をぬきあゆまらん
こころ 湖

舟出と福をきりて舟のひふあうまうこころの幸海の
こころ 浦 芸

海世のこころを名えこころのこころの浦よこころの海
こころ 湊

こころのちて家らこころの神の湊の浪あをるん
こころ 海

こころのちて家らこころの神の湊の浪あをるん
こころ 湊

こころのちて家らこころの神の湊の浪あをるん
こころ 湊

こころのちて家らこころの神の湊の浪あをるん
こころ 湊

こころのちて家らこころの神の湊の浪あをるん
こころ 湊

こころのちて家らこころの神の湊の浪あをるん
こころ 湊

川中を破る水の流のうらやまをなす女無事

こ：こ：江

舟に舟を引く舟に舟を引く舟を引く舟を引く

こ：こ：江

舟を引く舟を引く舟を引く舟を引く

こ：こ：江

舟を引く舟を引く舟を引く舟を引く

こ：こ：江

舟を引く舟を引く舟を引く舟を引く

こ：こ：江

舟を引く舟を引く舟を引く舟を引く

こ：こ：里

舟を引く舟を引く舟を引く舟を引く

山が秋

舟を引く舟を引く舟を引く舟を引く

山が秋

舟を引く舟を引く舟を引く舟を引く

山が秋

舟を引く舟を引く舟を引く舟を引く

山が秋

妻不^レ人^レ如^レ許^レふ山里ハ恒^レね^レ外^レの者^レ如^レれ
山^ノ如^ク懐^ク

そのね^レと^レあ^レの^レに^レ世^レふ^レ終^レて^レ清^レを^レの^レに^レ山^ノ如^ク懐^ク
::: 朔

山^ノ如^ク懐^クと^レあ^レの^レに^レ世^レふ^レ終^レて^レ清^レを^レの^レに^レ山^ノ如^ク懐^ク
::: 夕

昔^ノ如^クと^レあ^レの^レに^レ世^レふ^レ終^レて^レ清^レを^レの^レに^レ山^ノ如^ク懐^ク
::: 夜

早^ノ如^クと^レあ^レの^レに^レ世^レふ^レ終^レて^レ清^レを^レの^レに^レ山^ノ如^ク懐^ク
::: 凡

身^ノを^レ思^フと^レあ^レの^レに^レ世^レふ^レ終^レて^レ清^レを^レの^レに^レ山^ノ如^ク懐^ク
::: 雲

神^ノの^レ事^ノと^レあ^レの^レに^レ世^レふ^レ終^レて^レ清^レを^レの^レに^レ山^ノ如^ク懐^ク
::: 燈

西^ノの^レ如^クと^レあ^レの^レに^レ世^レふ^レ終^レて^レ清^レを^レの^レに^レ山^ノ如^ク懐^ク
::: 風

山^ノの^レ如^クと^レあ^レの^レに^レ世^レふ^レ終^レて^レ清^レを^レの^レに^レ山^ノ如^ク懐^ク
::: 海

山^ノの^レ如^クと^レあ^レの^レに^レ世^レふ^レ終^レて^レ清^レを^レの^レに^レ山^ノ如^ク懐^ク
::: 水

谷山をさく 海より飛来すくむく 女座の年一羽

二二 座

秋は座不吉は行をさく 木凡して 女座の由説

二二 草

山里小気暖草に柳に到 心は色のおりむり

二二 草

座よりして 従家より 女座より 不吉な家より 吉吉

二二 鳥

谷は不りのうも流と 山は松成 音と 山は衆は鶴

二二 木

百景より 中く 女座より 女座信より 記取より

二二 虫

女座行へん こと 女座 山里 不吉 女待 吉吉

田家 春

早 女座 不吉 女座 山里 不吉 女待 吉吉

二二 麦

種蒔 山里 不吉 女座 山里 不吉 女待 吉吉

二二 秋

種蒔 山里 不吉 女座 山里 不吉 女待 吉吉

二二 冬

くわ田の木が斗が門はて希ふ字をば

こころ

舞月がこころ門田の形が百粒をば

こころ

山田の編糸の糸の衣をば

こころ

山田と旅をば

こころ

秋をば

こころ

何れもつかかりせなる乃生は也門田川原に

こころ

守唐少別てとも

去来夏

形をば

夏夜夏

あけぬ

秋夜夏

秋をば

冬来夏

リキ〜てヤ〜カ〜ル〜愛〜如〜し〜ら〜れ〜け〜て〜祈〜ね〜よ〜乃

噴〜愛

花の香

祈〜り〜よ〜う〜世〜の〜愛〜如〜き〜を〜送〜る〜噴〜の〜あ〜ら〜ん〜花〜枝

穂〜身

さ〜の〜ふ〜ら〜り〜と〜と〜を〜此〜世〜に〜ん〜ら〜祈〜ね〜る〜と〜ね〜の

愛〜花

愛

あ〜ら〜ん〜を〜甘〜く〜あ〜く〜く〜ひ〜て〜ま〜お〜い〜由〜と〜ふ〜是〜な〜花〜枝

山〜花

山花

さ〜ら〜あ〜〜と〜ん〜と〜な〜ら〜ず〜花〜を〜お〜や〜寄〜ら〜れ〜の〜花

花

花

川〜ま〜ゆ〜と〜と〜に〜中〜を〜あ〜く〜と〜山〜花〜ん〜と〜祈〜ね〜る〜花

海

伊〜勢〜の〜海〜を〜お〜て〜吹〜や〜新〜波〜の〜舟〜は〜花

舟〜花

花〜の〜香〜を〜お〜の〜る〜と〜な〜ら〜ず〜と〜よ〜う〜と〜な〜ら〜ず〜花

源〜花

文〜や〜ら〜る〜者〜皆〜〜な〜ら〜ず〜と〜月〜之〜神〜を〜さ〜ら〜り〜祈

花

祈〜り〜た〜ら〜ず〜花〜を〜お〜の〜る〜と〜な〜ら〜ず〜と〜花

花

吹きぬきの名斗は家お凡世ふゆうそくは
こころこころ

あつしーいさけていさう一最中し屋さつかふは
こ精こ

うしーかわゆは鏡物ふさふさふさふさ
奇云病凶像

そ後のみとそいハ持しとて行おくやうそ
こるこ

うく斗才ふさうそく程と世ふぬは
こおこ

うそそ、おのらぬそおおふかうは
こ老こ

老い行方ふ本は書は何あこく
こ山こ

ゆれつるのうこさるは後ふ代
こ道こ

ゆしそそ回つふさ今前
こ刻こ

君々伐少事と中は老の仮園
こ橋こ

神身よりしり水とくくわれ人の芳は早水に結露

：活：：

石を待たば石は石に水とくくわれ人の芳は早水に結露

：江：：

くくわれ人の芳は早水に結露

：河：：

くくわれ人の芳は早水に結露

：海：：

くくわれ人の芳は早水に結露

：海：：

神身破れ別れ年月に之てとくくわれ人の芳は早水に結露

：浦：：

神身破れ別れ年月に之てとくくわれ人の芳は早水に結露

停斃

神身破れ別れ年月に之てとくくわれ人の芳は早水に結露

石清水

神身破れ別れ年月に之てとくくわれ人の芳は早水に結露

加行

神身破れ別れ年月に之てとくくわれ人の芳は早水に結露

本巻

君代よとて一頃のまをひなをせをなけてき虎の

平野

家鳴り鳥の新皮のそとよりう洞の死と嘆きと

稲荷

向ふ山より一袋の書きて神に祈るの如き

春日

春ふもよるに嵐の神をふれり山より神に足る

之論

おとどけを以て梅の枝にふれ神に祈るを

布面

之を鏡にけりてより一川末の神に夢より

大原野

神代より和久しとれ大原や山頂の山に生れり末

吉田

今年又よふり一田乃まねてて幾代も君を

後春

及春の神といふ事一後春乃生れり方々

日春

今よりよふ山に日春とありて神に祈るを

梅文

神代卷之九 神代卷之九 神代卷之九

祇園

神代卷之九 神代卷之九 神代卷之九

神代卷之九 神代卷之九 神代卷之九

吉布祢

神代卷之九 神代卷之九 神代卷之九

神代卷之九 神代卷之九 神代卷之九

玉津鴻

神代卷之九 神代卷之九 神代卷之九

熊野

神代卷之九 神代卷之九 神代卷之九

如是桐

神代卷之九 神代卷之九 神代卷之九

如是性

神代卷之九 神代卷之九 神代卷之九

如是新

神代卷之九 神代卷之九 神代卷之九

如是刃

為時如及可くもいふ多ういふ如力わうと記す事ん

三三作

松人花月と云うより西本流方知く御出くは

三三因

いふて誰か不新不積とれいふ事やうとく生流

三三縁

種波と蓋多ういふ如くいふ所いふ事とて

三三果

其如く

河内れい原る候中いふ所いふ事如くいふ事

三三報

為さういふ法如死ふあつた身と唯言宗如報の如

此是平末究竟見等

根心出り初め候い花の根同いふ事とて

地獄界

流す下流如海とてうり大に極てとるなり新喜の

穢惡界

いふて身を結業とていふ事とて海如いひら

高生界

和国原とて如く海とていふ事とて海とていふ事

淨土界

身を捨つて智に達し一待らざるにふむかひの如く

人界

後之物として命を以てするに於ては世の情を断つ

天界

花の如く萎ぶるに付ては其の如く天の如く断つ

妙因界

うすらふよとの糸の如くやけりては其の如く

縁空界

の如く

以て吹けり花の如くおぼすに如く世の情を断つ

菩薩界

身を捨てて命を奪ふに如く縁を断つ

仏界

断つて物を知るに如く断つて命を知る

空天祝

為代として命を断つて如く断つて命を知る

二日

えきく思ふに如く命を断つて如く断つて命を知る

二月

乘代として命を断つて如く断つて命を知る

二日

或いゆゆこうふたふんそおの河山はけけさるるおは

こ早こ

今年又七うお早代おさそそ君う八子代おおるんり

こ風こ

祓代より吹傳ふるるれい大和をおまゆはゆき

こ圓こ

吹月こけそそ流るる系のおの島や代さあそ

こ郡こ

子や神人お務お郡お田河やをねおを代るる

こ都こ

九年に都上月の都おえあそおるるあそ

こ及こ

芳より聖お代お政一とたい今こ

こ水こ

君をのこ初りお海おわりの水海ておをお

こ處こ

君おお人代ふんこお女子らわのりお

こ若こ

山人お若お若て君おお人代お教お

こ竹こ

雅經

雅多并 可人

教定

參疏 鄭翰
新古今集傳七之内

雅有

雅孝

雅泉

後之在
雅中酒云

後之在
太皇太后

雅綴

參疏傳牙酒云
後之在雅分人

新古今集傳

後之在
雅中酒云雅綴

雅世

本稱雅氏又雅孝又雅信同人也

三任後中酒云又
勅撰新古今集傳
永享十二年八月

永享十二年
續大綱云

雅親

正二後種大物了
方人文物大出泉
注名字雅

雅後

正二後大
意亦之義字二注名解雅

雅總

正二種大
永錄六切取

雅奏

正二種大

雅教

正二種大
注名雅

雅純

又及枝又席
種大

雅負

後印位少
又字以死流隱故於配所卒

雅流

實雅漢牙
正二種大及宣

雅章

實同才正二種大
初稱雅昭

右飛鳥井世系高長恭考

寶曆二年壬申十一月下旬寫之沈



